

特42

456

訂正
觀世流
諸家
卷之七

七
琴
流

68

七詩落

以筆意一二一二一二一二一二一二一二一二



才以捨小舟うらまえてもく甲斐

寺也うらまえてもく是の共法依

頼釣との秋子也。根を暇日石橋山

乃本歎よ味方うらまえて。解よ主勢

よ人程よ。先安房上総乃方入也

如才也と存の。うらまえて肥の次郎



書

御前ミマエより 御ミの味方と接し有

同也。此の世に安房と総乃の世にひさし

と好むく者も。世にひさし母はあふ

付久ヒサ長ナガてふ。世にひさし母はあふ

乃の世に申すくは。世にひさし母はあふ

世にひさし母はあふ。御前ミマエより

唯ただ今いま御前ミマエより傳つたへたる人教へらる

あると。世にひさし母はあふ。御ミの味方

御前ミマエより。世にひさし母はあふ。御ミの味方

子有。祖父為義らしむ。世にひさし母はあふ

世にひさし母はあふ。世にひさし母はあふ

世にひさし母はあふ。世にひさし母はあふ

世にひさし母はあふ。世にひさし母はあふ

長ナガてふ。世にひさし母はあふ。世にひさし母はあふ

あつり河傳乃天板と後きり
 一番よ八田代殿 柵二妻よ志七り
 乃次郎 三番よ去屋乃良
 四番よ去佐房五妻よ久 六平公去
 妻よ八 同 八遠平 子板よ六
 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
 龍門原上け去は屍とや

長てのつて国崎殿よふあき母
 たり神おつ入 行よ母よ出母より
 あつりおち 中くおち 智
 年行さく 母よさあつり
 らひ出さし 所もれ 宮平思の
 糸面 たるりつり 母よく 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

なれば我君よこそせよと云ふは
も謂ひ候 事々々々。昭石
橋山乃今我子。子々々々。作作
田丸と一義忠の副將軍と云ふは
侯野を組ぐ討事ありけれ親子
と一様二つ乃命あり也。見や去
肥後と云ふは母の親子と云ふは
親也

ごさし物づく喜平をお坊を如き平
さあしてこぬはあは親子の口一
くあり候へ候は候は候は道
理は物あり候は候は候は君よ
皇の御親也と云ふは。意は候は候は
よりあり候へ候は候は候は候は
皇よと候は候は候は候は候は

あり候へ去年遠年知るべき君乃御
ちか子よなきに親より芳しくし
御母よりあり候へ去年
き事さす者小君のは為父の命に
くあり候へ去年御母よりあり候へ
候へ去年君のは為父の命を
言去年あり候へ去年

悟道断乃れを申すあり候へ
為父の命をり候へ去年
き事さす者小君のは為父の命に
くあり候へ去年御母よりあり候へ
候へ去年君のは為父の命を
言去年あり候へ去年

まねてく^まく^ま申^ま候^まは^まり^ま其^ま所^ま
毎^まより^ま松^まと^ま久^ま一^ま行^まと^ま昔^まも^ま其^ま所^ま
と^ま中^まの^ま今^ま社^まを^まか^まら^まし^まま^まり^ま
の^まあ^まま^まと^ま又^ま歎^ま大^ま規^ま打^ま出^まし^まり^まか^ま
ま^まへ^まく^ま其^ま子^まと^ま公^ま事^まを^ま其^ま母^まの^ま志^ま
や^まう^まあ^まら^まし^まし^まし^ま務^ま又^ま名^まあ^まら^まし^ま
あ^まま^まれ^ま也^まと^ま我^ま子^まと^ま母^ま所^ま直^まら^まん

平^まお^ま毎^まよ^まま^まら^まら^まり^ま也^まと^ま思^まは^まら^まり^ま
ま^まの^ま裁^まと^また^まは^まら^まし^ま思^まは^まら^まり^ま
親^ま子^ま乃^ま別^まれ^ま痛^まり^ま也^まと^ま思^まは^まら^まり^ま
や^ま又^まり^ま守^ま君^まと^ま始^まめ^まま^まら^まら^まり^ま皆^ま令^ま
ま^まは^ま名^ま孫^まと^まを^ま惜^まら^まし^ま松^ま浦^まと^ま又^ま娘^まと^ま
ま^まく^まま^まら^まら^まし^ま毎^ま所^ま去^まり^ま候^まと^ま思^まは^まら^まり^ま
ま^まは^まら^まし^ま伏^まし^ま有^ま極^ま也^まと^ま思^まは^まら^まり^ま
ま^まは^まら^まし^ま伏^まし^ま有^ま極^ま也^まと^ま思^まは^まら^まり^ま

うねやとよれ^幸きよ^幸と^幸清^幸成
き^幸流^幸く^幸る^幸契^幸り^幸後^幸を^幸も^幸り^幸あ^幸る^幸を^幸臨^幸を
見^幸る^幸方^幸あ^幸ら^幸む^幸を^幸遠^幸く^幸は
浦^幸乃^幸立^幸列^幸中^幸あり^幸た^幸後^幸を
余^幸の^幸人^幸く^幸ら^幸む^幸て^幸憐^幸あ^幸る^幸。
舟^幸は^幸ら^幸う^幸子^幸。^幸愛^幸平^幸の^幸ひ^幸も^幸く^幸ら^幸む^幸。^幸

ま^幸と^幸ん^幸て^幸中^幸く^幸海^幸り^幸を^幸ま^幸り^幸
と^幸珍^幸く^幸心^幸所^幸く^幸を^幸行^幸た^幸り^幸歎^幸大^幸舞^幸
白^幸き^幸たり^幸ま^幸を^幸春^幸平^幸の^幸う^幸ら^幸む^幸。
と^幸く^幸頼^幸朝^幸も^幸あ^幸ら^幸れ^幸を^幸陸^幸を^幸不^幸給^幸
魚^幸尺^幸を^幸ま^幸り^幸ま^幸り^幸恩^幸愛^幸乃^幸契^幸り^幸を^幸
ま^幸り^幸今^幸を^幸限^幸と^幸思^幸白^幸を^幸入^幸ひ^幸ら^幸
儀^幸身^幸子^幸の^幸人^幸を^幸ま^幸り^幸ら^幸む^幸を^幸ま^幸り^幸ら^幸む^幸。

てあつたを平と可よ討死せ
たやとわうれて死にらさうのよ
子の別を義ありまおしく
張月北西乃を行旅定めの舟路
うれラカシ仲ある波のきましも討死
る急うとせうりキ上也甲あまはた
たのらば時并めて首まて名も下舟

漕舟の長たる高の舟ありあまよ
長船一艘みして人を出てあまらうと
あまらうとまおらう甲あま
作テの舟あれおらうのたかる甲
た系津あまらうと甲あま
の舟あひあもあも思もあま
あつたを平と可よ討死せ

刀多し中が極すうやれ舟と成
てその舟中極す行と書るを津
舟は津屋前にもや 沙ん極
^早言語道断の中うく物言秋味方
さう思ひて日日も頼むに朝
よの船申上り命有くを行ま心
べてく自害よ及んと腰の刀よ

さめく舟中極す物言秋味方
舟と書るに舟は津屋前にもや
^早中くの舟 徒行きて加極よの舟
そ是くを戯事して極事
陸舟は津屋前にもや舟は津屋前にもや
舟は津屋前にもや舟は津屋前にもや
舟は津屋前にもや舟は津屋前にもや
舟は津屋前にもや舟は津屋前にもや

申候 申候 申候 申候 申候
申候 申候 申候 申候 申候

申候 申候 申候 申候 申候
申候 申候 申候 申候 申候
申候 申候 申候 申候 申候
申候 申候 申候 申候 申候
申候 申候 申候 申候 申候
申候 申候 申候 申候 申候
申候 申候 申候 申候 申候
申候 申候 申候 申候 申候
申候 申候 申候 申候 申候
申候 申候 申候 申候 申候

。龍井の馬のふら飛てあり。まゝの好新。
。このてあ母屋のふまき。是は正徳
ひくまのふらあし海へ出肥のふま義
。あつ巻の者まゝくふそ 下あふ百粒
。あつ下の社下の縁下の今下の所下物語下を下あ
ふく落渡はりてあふあそ人くあ不
。あつ下の回下を下あ思下ま下し下ま下なる下ふ下う下新下

あつ下のあ下ま下さ下ふ下く下行下う下ま下ん下唐下
衣下類下のあ下ふ下く下れ下は下あ下の下ま下の下月下乃下益下
さう下く下ま下の下後下た下ま下の下収下有下の下あ下う下ま下
。あつ下酒下ま下の下那下ふ下は下ま下る下年下知下ま下目下出下
。あつ下あ下れ下ま下び下ま下の下所下舞下人下あ下ら下し下
。あつ下ま下の下舞下り下あ下ら下し下ま下の下地下
酒下ま下の下舞下り下あ下ら下し下ま下の下地下

三國志の巻をせし事其の序に
 一 御覽二十萬騎より上給ひ
 一 乃てたゞも子年
 一 此忠勅乃道より於宮に
 一 志忠をんれみらよる也
 一 乃家と久く色

右之本者觀世大夫織部以章句
 真本令放行畢

天保十一庚子歲孟春改正再板

皇都二条通御幸町西江入町

山本長兵衛



明治廿六年二月十七日印刷
 明治廿六年二月同日訂正出版
 明治廿六年三月廿九日別製本御届

定價三錢五厘

東京市麹町區飯田町四丁目壹番地
 宮内省御用達

訂正者 觀世清廉

發行所 京都市上京區二条通御幸町西
 兼印刷者 檜常之助



板權 所有

